［科目区分］: リーダーシップ開発コース

［授業科目名］: 教員研修プログラム開発演習

［登録学生数］: 5

令和元年度「授業評価・授業研究報告」

教育学研究科　城戸　茂

１　授業の目標及び内容

本授業は、教育実践高度化専攻リーダーシップ開発コース１回生を対象として実施したものである。本授業の目標は、松山市教育研修センター指導主事や小・中・高等学校の校長経験者及び大学教員からのアドバイスを受けながら、在籍校の実態を踏まえた学習指導や生徒指導に関する教員研修を企画開発することである。授業では、質の高い研修を開発するための技能を高めるため、学習の過程において、松山市の教員研修の一部を指導主事のアドバイスを受けながら企画･運営したり、作成した研修プログラムの発表会で出た同僚からの意見や校長経験者や大学教員からの助言を踏まえ、バージョンアップを図った研修プログラムを作成し、改善点等を中心に発表したりする場を設けた。

また、中核的なＤＰとして、「2. 学校改善・授業改善等にかかわる高い技能を身につけている。〔技能〕」及び「3. 学校教育にかかわる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方策を 適切に考え、高度な実践力をもって学校改善・授業改善等に取り組むことができる。〔思考・判断・表現〕」を掲げて取り組んだ。

授業の概要については、シラバスに示したとおりであるが、大学教員による教員研修に関する理論を中心とした講義に加え、中核市である松山市の教員研修を企画・運営しているセンター指導主事や、学校現場での実務経験を豊富に持つ校長経験者により、受講者が作成した研修プランに対するアドバイスを受ける場を重視した。さらに、作成した研修プランを基に実際の教員研修の中で講師を務めたり、互いの研修プランを基に協議を重ねたりする場を設けたほか、本授業で学んだ教員研修プログラム開発の視点から、学校で実施されている教員研修を参観させていただき、改善策を提案する場を設けるなど、理論と実践の往還を重視した構成とした。

２　授業評価

次ページの〔表１〕は、令和元年度後期授業を対象に実施したＤＰ対応授業評価結果の一部である。本調査結果を手掛かりに本授業を振り返ると、次のような成果と課題を挙げることができる。

まず、成果として次の２点を挙げることができる。１点目は、本授業で育成を目指した〔技能〕の側面については、授業評価を実施した科目の中では最も高い数値となっており、目的を達成することができたと考えることができる。こうした成果を挙げることができた要因については、次のように考えられる。まずは、大学教員による講義において、研修課題や研修目標の設定の在り方、研修プログラムの作成方法、実際の研修の方法や評価の在り方を中心にポイントを押さえた学習を行ったこと。そして、その後、学習したことを踏まえて教員研修プログラムを作成し、実際の教職員研修の場で実施させていただく場面を設けたこと。さらに、その後、実際の教員研修を参観し、学んできたことを基に、研修の在り方について考える場を設けたことを挙げることができる。〔表２〕は身に付けた教員研修プログラムの構築の視点を基に、実際の教員研修を参観した時の感想の一部である。これを見ると、研修の質を高めるための視点が修得されてきている様子が伺える。また、本授業の最後には、各学生が在籍している学校の実態を踏まえた学習指導や生徒指導に関する教員研修プランを作成・発表し、意見交換を重ねた。こうした理論と実践の往還の試みの成果の一端が、こうした技能面での成果につながったと考えることができる。

２点目は、本授業で育成を目指した〔思考・判断・表現〕のほか〔知識・理解〕や〔興味・関心・意欲〕の側面についても、〔技能〕に次いで高い結果となっており、おおむね目的を達成することができたのではないかと考える。

以上のように、４つの観点ともに比較的高い結果を得ることができたのは、理論と実践

の往還を目指し、センターの指導主事や実務経験豊かな校長経験者が関わる場を重視しながら、多様な授業構成を採用したことが大きな要因であったと考えることができる。中でも、〔技能〕の側面を伸ばすことができたのは、学んだ理論を活用する場として、実際の教職員研修の中で活用する場、実際の教員研修を参観する場、在籍校の実態を踏まえた教員研修プログラムを作成し発表する場、さらに改善する場の計４回設けたことによるものと考えられる。

一方、課題として、〔興味・関心・意欲〕の側面の評価について、評価結果は一定の成果があったと見ることができるものの、他の科目と比べると最も低かったことである。その要因として、授業がオムニバス形式であり、授業の流れをうまく作ることができなかった面があることが考えられる。今後、興味・関心を一層高める工夫を行っていきたい。

３　地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業では、全ての授業を中核市である松山市の教育研修センターで実施し、授業の中でも実際にセンターの指導主事から直接に指導やアドバイスをいただいている。さらに、松山市の教職員研修の一部に、学生が講師として関わらせていただいたり、他市町の教員研修の場を参観させて頂いたりするなど、地域社会と接点を持ちながら学びを深めていくことを重視して構成している。こうした点から、本授業は、本学が掲げる地域社会を核とする教育・研究を推進する上で、一定の役割を果たしていると見ることができる。

４　今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度に向けての検討課題として、次の２点を挙げることができる。

１点目は、学生の興味・関心を一層高める工夫である。本授業では、松山市が実施している教職員研修に、学生が講師として直接関わることができる点を大きなポイントとしている。しかし、研修の時期等の関係から、授業とうまくリンクさせることができる研修が限られているため、本年度は教諭以外の教職員を対象とした研修となった。こうした点が、結果に関わっている可能性も考えられる。センターとの連携を密にしながら、学生のニーズに少しでも添えるものとなるよう努めるとともに、教諭以外の教職員の研修となった場合でも、主体的に取り組めるよう意識を高める工夫等を行いたい。

２点目は、理論と実践の往還を図る観点から、理論の質を一層高めていくことができるよう、最新の研究成果等にしっかりと目を向けていくとともに、理論を活用する場を本年度は４回と昨年度より１回増やしたものの、質的な高まりという面からも再度しっかりと検討していきたい。

〔表 1〕2019 後期ＤＰ対応授業評価結果（4 件法：4 かなり達成　3 やや達成　2 あまり　1 全く）

	知識・理解	技能	思考・判断・表現	興味・関心・意欲
2019	3.60（6）	3.80（1）	3.60（7）	3.60（12）

※（　）内の数字は、授業評価の対象となった授業のうち課題研究と実習科目を除く計 12 科目中の順位

〔表２〕学校での教員研修を参観した際の研修計画の改善策に関する意見

学生	研修計画の改善策に関する意見
A	参加者の意識の差が大きな研修であった。参加者全員に対し、一律な成果を求めるのではなく、各自に応じたねらいを設定し、研修の進め方にも幅を持たせることが必要である。受講者の実態をしっかりと捉えた上で研修を企画することが大切である。
B	目的が大きいと実践に繋がりにくい。まずは、達成可能な目標を設定することが大切である。小さな成果を積み上げていくことで、教員の意欲も高まり、大きな成果へと繋げていくことができる。
C	研修テーマに対する教員間の温度差が大きいと感じた。教員一人一人が当事者意識をもてるような研修となるよう、内容等を工夫することが大切である。
D	90 分という時間内で、講義、事例発表、グループワークが行われ、密度の濃い研修であった。研修では参加者全員が何らかの形で自分の考えを述べることができる場を設定することや、教育の究極の目的は子どもの成長にあることを踏まえ、子どもを主語にした議論を行うことが大切である。
E	グループワークの中で、実施に対して後ろ向きの意見も複数見られた。こうした意見もうまく拾い上げていく手立てをしっかりと持っておくことで、話合いの質を高めていくことができると考えた。